



Title	[書評] Somchai Phatharathanunth, Civil Society and Democratization: Social Movement in North Thailand
Author(s)	重富, 真一
Citation	アジア経済 49.1 (2008.1): 78-81
Issue Date	2008-01
URL	http://hdl.handle.net/2344/825
Rights	

IDE-JETRO 日本貿易振興機構 (ジェトロ)
アジア経済研究所

Somchai Phatharathananunth,

Civil Society and Democratization: Social Movements in Northeast Thailand.

Copenhagen : NIAS Press, 2006, xii + 251pp.

しげ とみ しん いち
重 富 真 一

I

本書は1990年代に結成され、幹線道路の行進や封鎖など過激な方法で農民の要求を政府に突きつけてきた「東北タイ小農民フォーラム」(Small-Scale Farmers' Assembly of Isan: SSFAI)に関するモノグラフである。1990年代のタイは政治改革の時代であり、政治的イシューを掲げた社会運動が数多く起きた時代でもある。その担い手の多くはNGOや知識人などエリート層であったが、底辺の民衆が自らの直面する問題を自らの手で政治的に解決するため組織を作ったケースもあった。そのひとつ「貧民フォーラム」(Assembly of the Poor: AOP)についてはすでに詳しい紹介があるが、AOPに先立ち形成されたSSFAIについての詳細な報告は、公刊されたものとしては本書が初めてであろう。本書の構成は、以下のとおりである。

はしがき

第1章 序論——市民社会と権利を持つ権利——

第2章 東北タイにおける政治的急進主義

第3章 東北タイ小農民フォーラムの起源と移行期

第4章 急進主義期(1993~1995年)の東北タイ小農民フォーラム

第5章 対立, 分裂, 新戦略の試行

第6章 妥協的戦略失敗後の東北タイ小農民フォーラム

第7章 地域団体から全国団体へ

第8章 結論

第9章 エピローグ

II

著者は、はしがきと第1章において本書の問題意識と方法論を論じている。著者は「いかに民主主義を深化させるか」という設問をたて、エリート民主主義(権力内外のエリートによる政治改革)では実現しないと主張する。著者によれば、市民社会こそがそれを実現する場なのだが、市民社会概念は抽象的であり、国家と市民社会の複雑な関係を説明するには不十分である。そこで社会運動と階級概念を援用する。すなわち小農のような従属的階級が組織を作り、「権利を持つ権利」を獲得するための運動をすることで民主主義の深化が実現する、と主張する。その事例として取り上げられたのが、東北タイの小規模農民による運動体(SSFAI)であった。著者は1997~98年の1年間、SSFAIの活動に参加しながら情報を集め、さらに新聞記事や著者のインタビューも使って運動の展開過程を描き出している。

SSFAIの生成は、1980年代に活発化したNGOの活動と深い関わりがあった(第3章)。東北タイのNGOは、もっぱらコミュニティの強化を目指して活動していたが、1980年代末から資源開発やダム建設などによる環境問題が顕在化し、また政府の農業政策が小農経済を圧迫する懸念が強まると、政治的運動にも力を注ぐようになった。これらNGOの呼びかけで、1991年に様々な問題に直面するグループが集まって作られたネットワーク組織が、SSFAIである。

このころ東北タイでは、政府の土地配分プロジェクトで25万もの世帯が国有地からの立ち退きを迫られる事態が起きていた。そこでSSFAIは1992年6月、東北タイの農民4500人を集め、東北地方とバンコクを結ぶ幹線道路を徒歩で行進し、政府が交渉に応じないとみるや道路を3日間封鎖した。驚いた政府は直ちにSSFAIと交渉に入り、農民の要求を受け入れて、プロジェクト廃止と農民の帰還を認める文書にサインをした。

自分達の力を自覚したSSFAIは、直接行動を戦略

として位置づけるようになる(第4章)。また組織をネットワーク型ではなく、中央のリーダーが意思決定できる体制にした。戦略と組織を衣替えたSSFAIは、1994年に2回の「長征」(The Long March)をおこなう。1回目は200人の代表団をバンコクに送り、首相府で交渉に当たらせる一方で、2000~3000人を東北からバンコクへ行進させた。政府はSSFAIの要求を受け入れたが、デモが終わるとそれを履行しなかった。そこでSSFAIは第2回目の「長征」をおこなう。政府はまたもSSFAIの要求を受け入れたが、やはり実施しようとしなかった。

このようにSSFAIの戦略は、東北タイからバンコク目指してデモ行進し、それを止めようとする政府の強硬措置を引き出してメディアの関心を引きつける、というものである。新聞記者は行進中の農民からその深刻な状況を直接聞き取るので、記事は農民やSSFAIに共感する内容になった。運動が一定の成功をみたことで、SSFAIへの参加グループは増加し、会員は5万人になった。新しいリーダーも現れ、また農民の交渉力、権利意識も高まったので、政府は勝手に農民を土地から追い出すようなことができなくなった。しかしSSFAIは、結局政府に約束を守らせることができなかった。次第に政府はデモの挑発に乗らなくなり、そうなるメディアの関心も引きつけられず、圧力がかけられない。また中央集権的な組織になったため、農民の多くは意思決定に参加していないという問題もあった。

大がかりな直接行動にもかかわらず政府の約束履行を勝ち取れなかったことから、実力闘争を重視するリーダーは批判され、彼らはSSFAIを去ってAOPに移った。その結果、SSFAIでは政治家との交渉を重視するグループが主導権を握った。チャワリット首相やその政党(新希望党)とのつながりを使って、政府から資源を引き出す運動方針がとられるようになる。SSFAIは政府の農業向け低利融資プロジェクトに注目し、その運営委員会に彼らの代表を加えることを政府に要求した。得られた資金の分配方法をめぐってリーダーの対立が起こり、SSFAIは3つに分裂した。

一方AOPは、SSFAIの轍を踏まないため、ネット

ワーク組織の形態をとり、政府が閣議決定をするまで抵抗を止めないという戦略をとった。そして「99日間首相府前座り込み」を実施する。これによってAOPは政府から9つの閣議決定を引き出したのだが、まもなくチャワリットが辞任しチュアン政権になると、そうした約束は守られなかった。

このようにSSFAIは妥協的方法をとったが政府に取り込まれて分裂に至り、AOPは対決的方法をとったが失敗による挫折感が大きくなってメンバーの闘争意欲を削ぐことになった。要するに両方とも失敗であった。

分裂後のSSFAIは、闘争方針を変化させる(第6章)。政府に対し、農民復興基金(FRF)を設立してその資金を農民の借金問題解消や、農村企業設立奨励に使うという提案をおこなった。その一方、SSFAIは1998年に新しい戦略として「土地占拠」という方法を試みた。一度はそれが成功し、政府の譲歩を引き出したものの、それに続こうとした別の農民達は、政府の強制排除に抗することができなかった。土地占拠も容易な方法ではないことが明らかになった。

このように分裂や戦略の混乱状況にあったSSFAIであるが、FRFの設立を契機に、突如その勢力を拡大し始める(第7章)。FRFは1999年5月に国会で承認され、この資金を利用したい農民は、会員50人以上の農民組織に所属することが必要とされた。それゆえすでに名の知られたSSFAIに、農民が大挙して加入したのである。また、SSFAIはこれまでの土地問題重視から所得の問題に重点を移し、組織名称からIsan(東北タイ)の文字を除いて、Assembly of Small Scale Farmers(ASSF)となった。2002年5月までにASSFは全国76県中43県に30万人の会員を擁する大組織に成長した。

これ以後ASSFの活動は、FRFの運営において主に主導権を握るかに集中した。基金理事会や事務局でのリーダーシップをめぐる政府や政治家との駆け引きや争いがあり、それを有利に進めるためにデモなどの集合行動もおこなった。全国の農民グループ代表が争ったFRF理事会選挙(2002年6月実施)では、ASSFは20議席中、最多の4議席を確保した。

モノグラフはここで終わっている。

III

本書はSSFAIのリーダー達がどのような考えのもと、運動の方向性や戦略を決め、運動が政府のどういった対応を引き出したのか（あるいは引き出せなかったのか）を、丹念に描いている。こうした社会運動体の内部情報も含めた実態は、部外者にはほとんど知るべきがない。紛争時だけではなく平時の動きも含めて、運動体の状況を明らかにした点に本書の大きな貢献がある。本書がタイの社会運動に関する必読文献となるのは、間違いない。

しかし3つの点で評者には不満が残った。ひとつは事実確認の方法に関するものである。著者は自ら運動に参加し、またたくさんのインタビューや新聞記事（その多くはやはりインタビューによって作られたものである）に依拠して得られたデータを用いている。著者は複数のインタビューから裏付けをとるようにしたと書いているが、あくまで口頭の裏付けに過ぎない。数字など主観が入り込みにくい事実を使って、インタビューから得た情報の裏付けをする必要があるように思う。たとえばSSFAIが資金的に外部に依存せず、農民自身が調達した資源でデモを賄った（だから自立した運動ができた）、という主張をするのならば、デモではどれぐらいの資金や資源が必要で、それを実際どれだけ調達できたのか、推計でもよいから数字が欲しい。組織をネットワーク型から中央集権的なものに変えたというのだが、どこにも組織図が描かれていない。すべての事実について、こうしたデータの裏付けがとれるわけではないが、SSFAIの組織や運動方法を特徴付ける重要な点については、そうした努力があっただけである。ちなみに本書のなかに表は1枚だけ。それもSSFAIとAOPの要求項目を対比させて羅列したものである。

さらに著者が提示する事実のなかに、「誰が、何をした」という事実と、「誰が、どう考えた」という事実とがある。後者は行為の意図であり、前者より主観性の度合いが高くなる。表明された「意図」

の持つ影響力を考慮して、発言者が本音とは別の「意図」を述べる場合すらあろう。SSFAIのリーダー間に対立が起きたとき、それぞれのリーダーは自分の立場を正当化する（逆に対立者を批判する）「意図」で発言するであろうから、そうしたなかから何を「事実」としてとるかは非常に難しい。著者がどのようにそれを精査したのかも、書くべきであった。

2つ目の不満は、事実の分析方法に関するものである。著者は、市民社会、社会運動、階級、「権利を持つ権利」など抽象度の高い概念を用いて事実の分析をするのだが、その内容は常識的で、取り立てて論じるほどのものが多い。たとえば第8章で、著者は本書の結論を次のように述べる。

市民社会理論だけでは、国家・資本連合に対抗する市民社会組織の闘いの成否を説明できない。そこでまず戦略について検討する。過激な方法と穏健な方法の2つがあるが、大切なのは両方（抵抗と交渉）を適切に組み合わせることである。また運動組織のあり方も重要で、分権型（ネットワーク型）と中央集権型それぞれに長所短所があるから、両者のバランスをとることが大切である。

「市民社会」概念は抽象度が高いので、そこに戦略論や組織論を入れ込んで実際の「民主主義深化」過程を叙述しようというのだろうが、その結論が戦略における「抵抗と交渉の組合せ」、組織における「分権型と集権型の調和」というのではあまりに凡庸である。

3つ目の不満は、著者の立つ位置に関するものである。著者は1年間SSFAIの運動に参加した。SSFAIのなかでも、直接行動的な志向を持つリーダーに共感しているように読める。第8章（結論）の後には「エピローグ」が付けられ、そこで著者は自身のタクシン政権批判を纏々述べている。こうした政治的意見表明よりも、これが本論の「続き」であるならば、なぜ多くの農民等がタクシンを熱烈に支持したのか、なぜSSFAIやAOPが反タクシン運動に積極的に参加しなかったのか、という「事実」を分析すべきであったろう。著者の政治的中立性、分析の客観性について、読者に疑問を持たせる結果となっている。

本書は社会運動研究の難しさを我々に示してくれている。詳細な事実の把握にはインタビューという手法は欠かせない。しかしそれだけでは、理念や意図をともなって繰り広げられる「運動」という現象を客観的に把握したことになる。詳しい情報を得ようとして運動に近づけばそれだけ、分析者も運

動体やリーダーへの共感を持つようになる。それでも客観的に現象をみるのは容易ではない。語られた事実を誰もが（どのような政治的立場であっても）納得できるようにするためには、その事実の裏付けと事実分析の切れ味が決め手となるのであろう。

(アジア経済研究所地域研究センター)